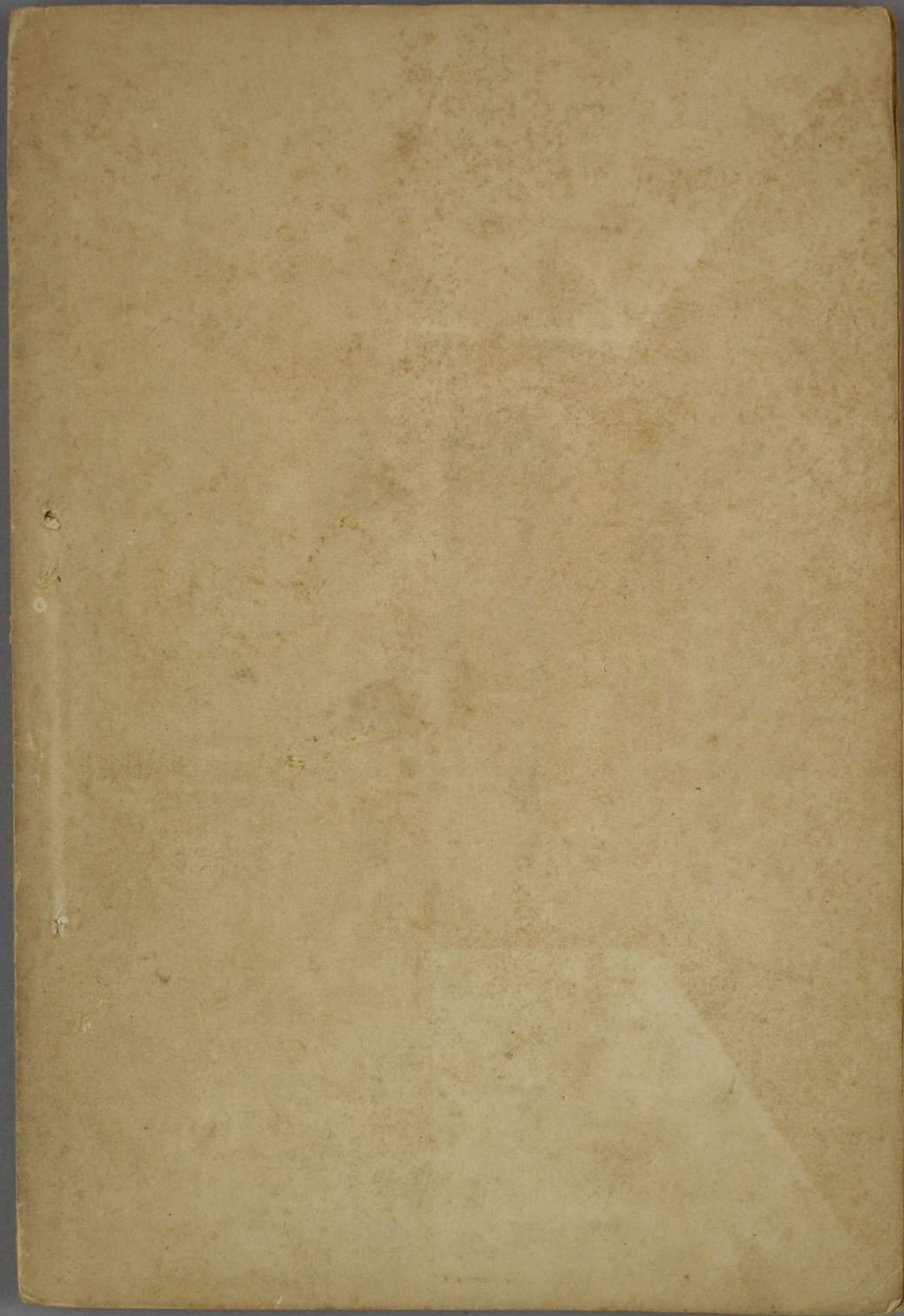


明
書

土井晚翠著



土井晚翠著

曉鐘

土井晚翠著

曉鐘

士
到
翠
香
第
一
卷

四
十
餘
年
睡
夢
中
而
今
醒
眼
始
朦
朧
不
知
日
已
過
亭
午
起
向
高
樓
撞
破
鏡

王
陽
明

曉鐘目次

萬里長城の歌	一
花上の露	一〇
月と水	二二
惆悵吟	二三
夏の夜	二六
暗と眠	二八
秋興八首	二九
岸上の終焉	三五
白桃花	二七
平和	二八
弔吉國樟堂	三〇
破船	四〇

曉鐘目次

Wenn ich nicht sinnen oder dichten soll,
so ist das Leben mir kein Leben mehr.
—Goeth

La Muse est faite pour chanter l'ideal,
aimer l'humanité croire au progrès,
prier pour l'infini.
—Hugo

天 上	四一
無 限	四三
黑龍江上の悲劇	四四
登高賦	五五
夕の姿	六一
おほいなる手のかけ	六三
不 朽	六四
露 霧	七五
富嶽の歌	一〇三
附 録	
江上の逍遙	一一五
深 淵	一二三
故郷の墳墓	一三八

曉鐘

土井 晚翠 著

萬里長城の歌

(一)

生ける歴史か積もり來し齡は高し二千年
 影は萬里の空に入る名も長城の壁の上
 落日低く雲淡く關山みすくくれんとす
 征驂 恨み留りて遊子俯仰の影一つ。

絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し、
 春乾坤に回りは空おとどく霞み行く、

曉

鐘 萬里長城の歌

二

天地の色は老いすして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空に姿は見ぬ夕雲雀。

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ歳は流れぬ千載の
昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見む、
殘壘破壁聲も無し恨みも暗し夕まぐれ
春朦朧のたゞなかに俯仰遊子影一つ

(一)

三皇五帝あと遠く「六王終りて四海一」
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし。
「わが宮殿を高うせよ」一たび呼べは阿房宮
「わが邊境を固うせよ」二たび呼べは萬里城
春は驪山の花深く秋は上郡の雲暗く

管絃の響雲に入る舞殿の春の夕まぐれ
袂を舉げて軽く起つ三千の宮女花のごと
花を散して玉甃に浮かす歌扇の風もよし
彫龍の欄奥深く薫ほる蘭麝の香を高め
珠簾を洩るゝ銀燭の光消わなで夜や明けむ。

西臨洮の嶺高しよゝ遼東の谿深し、
流を埋め山を截り壘を連ぬる幾千里
かいりの燧天を焼きつるぎの光霜凝ほり
殺氣夏猶ものすく守るは猛士二十万
漠のあなたに胡笳絶わて匈奴の跡は遠ざかる。

(二)

「北夷の憂絶果てゝ境は堅し國安し
先王の書も焚け果てぬ天下の儒者も埋まりぬ

曉

鐘 萬里長城の歌

三

曉

鐘 万里長城の歌

四

わが万世の業成りぬ「君王の思しかなりき。

知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く

歌臺の響よそにして獨りあらしのつふやさを

「浮世の花の一盛り褪むるに早き色見すや」

聞け長城の秋の營旌旗の暗に消ゆるとき

また、く光露帯びて星の竊かにさゝやくを

「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ」

(四)

春靜かなる東海の縁を涵す波の上

不死の金闕遠くして童女五百の舟いづさ、

絳霞の光天上の花とよしへに匂へども

土に下れば沈澁の示すは獨り世の脆さ、

至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ

金人十二鑄なせどもかれに無象のつるざあり。

心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣

爾の策は成らすども無常の風はあらかりき、

天地靜かに夜更けて江流秋に咽ぶとき

獨り汜橋のかたほとり燃ゆる心もしづまりて

思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、

鐵推血無し博浪沙鮑魚臭有り沙丘臺。

(五)

嗚呼死屍未だ冷わすしてかれ「万世の業」いづさ

暗君嗣きて上に在り倭豎の害よなごあらき、

民の怒は火の如く戍卒を叫び兵は起ち

楚人の一炬閃めきて咸陽の宮皆焦土。

曉

鐘 万里長城の歌

五

曉

鐘 万里長城の歌

六

霧れざる空に虹懸けし復道の跡今いづれ、
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、
衰蘭露に悲めば遺宮空しく草の宿
驪山の麓春云去れば花おどく涙あり。

斬蛇のつるぎ炎精の光もさはれ極みあり、
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり、
其移り行く世の習ひ二京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶わす。

(六)

邦は亡びて邦に嗣ぎ人は代りて人を追ふ、
鼎は移る朝二十歳は流るゝ曆二千、
中華幾たび烽舉がり長城の壁越來り
また越去りし蠻族の數さへいかに世々の跡。

曉

鐘 万里長城の歌

七

山川影は替らねど春夢空しく跡も無し、
群雄の覇圖いたづらに残すは獨り史上の名、
獨り邊土に影絶わす齡重ねて二千歳
殘壘昔に今青む長城の影尊としや。

民の膏血世の笑ひ逆政のかたみそれながら
歴史の色に染められし万里の影ぞなつかしき、
其面影に忍びいで泣くは懐古の露のみか、
暮春の恨み誰がために霞も咽ふ夕ぐれか。

(七)

霞も咽ふ夕まぐれ遊子俯仰の物思ひ、
北夷禦ざし長城の昔の跡は替らねど
時世空しく流れては中華の姿あすいかに、
秦漢魏晋移り行く昔の跡を引替て

西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。

西曆一千九百年東亞のあらし明日いかに、
 中華の光り先王の道古の民を救ひ得じ、
 愛を四海に傳ふべき神人の教いま空話、
 看すや虎狼の牙鳴す「基督教徒」血に渴き
 群羊守る力無き「異教の民」の聲呑むを。
 俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡きむ、
 征驢恨み嘶ける響きを返す壁のもと
 思も遠く眺むれば霞たゞよふ大空の
 自然の樂も絶果てつ關山暮れて星でて
 恨を呑む長城の姿は暗に呑れ行く。

さらば別れむとあしへにわが長城の壁のごとく

(盡きの思は大空の星の光に任かせ置きて)

其星移る千載の時の流の末遠み

替らで影を尙とめむ殘壘にまた忍びで、

我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれしらす。

嗚呼「永劫」の「脈搏」はいづれの時か鎮まらむ

人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌、

破壁聲無き傍にまた落日の影を帯び

流るゝ光積り行く三千の昔忍ぶ時

かれ永遠の聲擧げて何の國語に歌はむか

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡

笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり

玉樓の花風の恨み殘壘のあらし天の樂
嗚呼千載の後の世の詩人よ既に君の歌
今も響けり長城の暗に隠るゝ壁の中。

(明治三十二年春稿)

(註) *天下の兵器を收めて咸陽に聚め銷して鑄金人十二を爲くる(十八史略)

**張良始皇を博浪沙に狙撃して成らず○始皇巡狩の途沙丘平塵に崩す時臣秘して裏を發せず一石の鮑魚を以て其臭を乱る(同)

*** "Pulsschlag der Ewigkeit" Liehman 氏の句を直譯す。

花上の露

春のたましひ花とよび
曙の精露といふ。

雪より白き花の膚
汚に染まじ露の恩。

玉より清き露のしづく
碎けじ落ちじ花の思。

春のあけぼの花と露
結べる契り誰が手より。

のゝ花露によりてゑみ
あゝ露花によりて生く。

曉

鐘

月

と

水

十二

月と水

山の端いづる夕の月
谷間流るる夕の水
天と地とは隔たれど
二つかたみにあひしたふ。

影は親しくやどせども
むつみ語らんすべもなみ

月の恨みに空くもり
水の恨みに瀬はむせぶ。

かくて空なる月の旅
かくて下界の水の旅

いつか望みの影をひて
流れは澄みぬ空晴れぬ

月は落ち行く西のそら
水は流るゝ西のうみ
海と空とは隔てねば
月と水との戀なりぬ

惆悵吟

(一)

天女の胸に憑りかゝり
移るひ果てし花束を
抛ち棄てゝわれ泣くこ

曉

鐘

惆

悵

吟

十三

見しもはかなの夜半の夢。

覺めても熱きわが涙
拭ひもあへず窓あけて
見れば緑の青葉かげ
落ち行く月は圓からず。

いみじきものはかなしと

今さらのるか夜半の鐘

音も霞の底深く
引かれて遠きわが思ひ。

(三)

花にあまがれ花に泣く
浮世の春は暮れにけり

霞む月かげ夜半のかげ

八重の櫻の木もとの

短き夢をいかませむ
さめずありなばあゝ戀よ。

花散り果てし青葉かげ

今更清し夜半の月

昨日の影を戀ふべしや
今日の光をめぐべしや

思に迷ふ人の子に
悟りをたまへあゝ神よ。

夏の夜

はやたろがれの影寄せぬ、
風おもむろに吹きかよふ
都大路の夏けしき
洗ひすてたる夕立の
名残柳に玉とめて。

まばゆく照す電燈の
光はにほふ夜の花、
湯あがり姿逍遙の
すがた幾むれ袖軽く
咽ぶはたかさローズの香。

おほ空高く月いで、
八百のちまたの隈もなく
照す涼しき夏の夜や
雲はしづかに取りまて
残る稀なる星のかけ。

そゝろあるきに夜ふけて
袂は重し露ふかし
月なゝめなる時計臺
ふたつの針の重なりて
うつも高しや時の數。

傾きかゝる天の河
仰ぎて家路さして行く

曉 鐘 暗 と 眠

十八

逍遙の群あどもなし
ちまたのあるじ今はたゞ
月の光と吹くかせと。

「暗」と「眠」

喘ぎ疲れて西ぞらに弦月遠く沈むあなた
劫初我世に造られし光照らざる森の中
「暗」と「眠」の影ふたつ
かれ氣を吐て人界の愁を夜半におしぬぐひ
おれ手を舉げて煩へる天地を夢に誘ひ行く。

秋興 八首

一陣吹さぬ秋の風、
雲より送る惨憺の自然の吐息たがためか。
山河姿を改めて非情も暮の色恨み
清怨堪へず聲を呑む詩人あどくく涙あり。
誰か彩虹を攀ちて空高く
淋しき下界の塵の色を
かみ銀漢の流に洗はむ。
嗚呼一歌、われすでに傷みぬ、
天は黄昏を帯ぶ一様の愁。

「玉露楓樹」も秋の歌

杜陵の詞仙金鐘のしらべは餓を補はじ。

曉 鐘 秋興 八首

十九

曉

鏡 秋興八首

二十

西歐の空眺めても詩神の寵兒みな愁
 桂樹のほまれ緑葉の光は花の色ならじ。
 狂げて兒童の師と詫ぶる垂翅は況して不似の分、
 さらば滄浪の曲に人の世の窮達のを忍ばんか。
 嗚呼二歌、われわれを嘆きぬ。
 雲は残陽を蔽ふ惆悵の色。

秋は更け行く青葉山故園の姿いまいかに、
 扶搖のあらし音を絶えて雄圖は夢か五城樓。
 *桃李の盃の缺けしより三百年の春移り
 山川の靈替らねむ偉人の叫びまた聞かず。
 波間の月の影冴ゆる秋は名に負ふ千松島。
 *汀の寺に誰れか今こはん英主の不死の魂。
 嗚呼三歌、われ郷を忍びぬ。

菊は荒園にはほふ瀟々の露。

扶桑の帝土千載の詩運は毎にうすかりき、
 桂はな吹く西の空薫り比へんすべもなみ
 さらでも腕き文の華今また秋に逢へるかな。
 流水遠く春去りて谷に芝蘭の花碎け、
 逸韻空にむなしくて九阜の鶴聲もなし。
 月はすみだの秋の汐岸べのいほりいつまでか
 蟄龍の怠りに風雲の氣の潜めるや。
 嗚呼四歌我文を愁へぬ。
 風は簷端を掃ふ落葉の聲。

海若驕る秋九月、
 浩々の水眺むれば思ひは遂に窮まらず。

曉

鏡 秋興八首

二十一

曉

鐘 秋興八首

二十二

波のあなたの邦いかに、
邦の眺めの數いくつ、
花は掩はん詩聖千古の墓
月は照さん雄都七丘の墟。
歴史の染むる長江の流れは、廻る肥沃の土、
氷河を下す萬仞の峰は日に照る夏の雪、
空しく夢に入り去りて今年の秋も更けにけり。
嗚呼五歌われ西をしたひぬ、
烟は波上に横たふ長汀の夕。

帝都の春に背き去りし友は山川今幾重、
夢も迷はん邊城の搖落の秋、歌ありや、
やめよ世を泣く慷慨の涙は酒と化しもせじ、
一飽足らば昭代の民ども笑へ肱まくら。

白露に咽ぶ寒蟬のわれもねになく夕まぐれ
たゞ一片の雲の色に遠く千里の思を寄せん。
嗚呼六歌、われ友を惜みぬ、
影は遙空に迷ふ雁字の群。

一輪の明月に二千里外も暗からじ
高樓簾を捲き去りて捲き去りて
關山のあなた異郷の空を思はゞや。
三十六の峯青き舊都の夏の夕まぐれ
一葉の舟嵐峽の縁の流、水澄みて
情は傷みぬ千載風月の色
文は論じぬ一代才人の筆、
歡會夢は長からで秋はそゞろに更けてけり。
嗚呼七歌、われむかしを戀ひぬ。

曉

鐘 秋興八首

二十三

曉

鐘 秋興八首

二十四

露は松簾に滿つ銀蟾の影。

輪影西に傾きて九天の露聲も無し、
 人間わが世明月の光は常に圓からず、
 三千の素娥瑤臺の舞曲は誰か耳にせん。
 下界の絃歌いみじきはたゞ愁絶のしらべどか、
 千載何の處にか理想は實に返るべし。
 清夜の一歌たゞしばし秋のかほりを身にしめて
 廣寒殿の風のねに蒼茫の思託^すんか。
 嗚呼八歌われ曲を了へぬ、
 月は星河を渡る五更の曉。

(明治卅二年秋語)

*「只把春風桃李盡仙臺潘祖の句公の蹟は松島の瑞慶寺にあり

岸与の終焉

白布のとばり拂はせて
 涙にくもる目に見やる
 夕海原はしづかなり、
 ひとつ東の暮の星
 そはたましひの行くさどか

檐の松風さよなかに
 叫ぶ恨はたがためぞ
 ともしび暗し無象の世
 見るかいまはの彼が目は
 魂は半ばは過ぎ行きて。

曉

鐘 岸上の終焉

二十五

曉

鐘

岸上の終焉

二十六

あかつき清き八重の汐
沖路はるかに誘ふ風
雲を拂へばさしのぼる
朝日の影ぞまどかなる
途を迎ふや逝く魂の。

やがて黄金の波湧きて
すなごりの歌いさまして
四方に漕ぎづる白帆船
其舟遠し波のあなた
其魂遠し星のあなた。

白桃花

朝日影そう浅みどり
谷間を過ぎて聲高く
清く流れる春の水
みなもに戀と思とを
春もろ共に浮べさりて
白桃の花いづち行く。

消ねせぬ雪の色みせて
羊ひとむれ草飼へる
流に添へるみどりの野
まひるの空に夢みたる
牧の子笛を捨てて泣きて

曉

鐘

白桃花

二十七

曉

鐘 白桃花
白桃の花去るを見き。

二十八

百の柴舟しらは舟
あむる紅夕霞
廣き流れのかた岸に
緑暮れゆく青柳
柳のもどに流れよりて
白桃の花また去らじ。

平 和

海に黄金の波を湧かし
空に燭の雲を染めて
しづかに落ち行く夕日の姿、
見よあめつちの胸の中

おほいなるもの彼にあち。
海にうつむく影をてらし
空にいみじき香を吐きて
岩かげにたつさゆりの姿。
見よあめつちの胸のうち
うるはしきもの此にあり。

おほいなるもの光を射
うるはしきもの色を染めて
夕にみつる愛と平和、
花は落ち行く日を慕ひ
日はたゞすむ花を戀ふ。

曉

鐘 平 和

二十九

弔吉國樟堂

(一)

玉輦花を積みおせて霞に沈む春の神、
 別れを遠く欄に憑り流にのぞみ眺めやる
 空銷魂の色深き五城樓下の夕まぐれ、
 幽蘭むなしく香をこめて白玉樓に君ありと
 都のたより一封の涙の痕は夢むらす。

嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん、
 夢を抱て流水の光を慕ふ香をはやみ
 散りてはかなき人生の花の行るや今いづか、
 緑は烟ふる一望の柳眠りて聲もなし、
 雨を含める夕ぐれの雲も有情の色にして

青山花を葬りて夕の森に月黒し。

無心の調か牧童の姿は見ねぬ笛の音、
 暮天の暗に包まるゝ愁の耳に聞きとれば、
 萬古盡させぬ人の世の恨を述ふる靈の歌
 閻浮のよその泉より思を汲むに似たりけり。

(二)

昨日は齡二十六、けふは永劫の郷の靈
 芳蘭花は脆うして運命の神ねたみあり
 一瞬の前君ありき、一瞬の後君あらず、

四歳都の假やどり美りし道は淺からず、
 斯文の光仰ぎ見るひとつの窓の影ふたつ
 其影ふたつ人の世に今百年の別れとや。

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十二

夕日いろどる不忍の池の汀のさやれ波
岸の逍遙袖かろく手を携へし日もむかし
隅田の堤夕ぐれの朧の月も散る花も。

思いためる雪の暮正月京をたちいでつ
忍ぶが岡のあけぼのをまたも共にと契りけん
名残の聲は春風に今もひゃげぞ人あらず。

昨日は山河九十餘里今は生死の關幾重、
月の光の名にしおふ千松島かげ波のへに
夏を忘れて歌はんと契りし人はいつあそや。

(三)

都を思ふ今更に母校の春の夕げしき、

朱門の垣は深緑楊柳のかげ暗からむ、
ゆふべ花咲く電燈の光まばゆき玻璃の窓
*千百の巻集めきて探れる世々のあとかたや、
それはた空し學の海さき*のあらしを傷みきを。

あゝあゝ細く光ある雙眸の星消落ちて
かたみと残る一魂の灰のみ郷に今歸る
火輪大地を馳けり行く東海の驛五十三、
生時のむかし仰ぎ見し希望のかげの富士の嶺
今は愁の雲閉ちて神秘の色や深からん。

薩摩濁波のあなた夏や來ぬらし古城の夕、
新なるその墓あらたなるその緑、
やがて照らん春を忍ぶ半輪弦月の光、

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十三

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十三

やがて聞かん血に叫ぶ千聲杜鵑の恨、
おれより南樓夢常に短からむ、
おれより西海波とおしへに咽ばむ。

かくて三尺の塚ひとつ(恨や疑りて石と立つ)
悽冷の面とゞむるはたゞ薄命の夢のあと、
是より日々に深み行く苔の緑に花も無く
泉臺暗くとおしへの夜にむくろはしづみ行く、
土にむくろは歸り行く——魂の行く糸はいづおぞや。

(四)

およひ淋しき雨のおとに愁は花の上ならず、
天地の染むる暗の暮におもるは人の世々の思ひ。
名も日ぐらしの里のゆふべ烟と消ねしかたみの雲

しぐれておゝに我宿に花を碎ける雨と降るか。
のきばのしづく夜半の窓に無韻のおとば何の恨み
ともしびなれも心ありて忍ぶか過ぎし人のなごり。

しづくの音も絶ゆるとき更に『静寂』の語る思ひ、
ともしの光消ゆるのち更にさゝやく『暗』の言葉。

(五)

油は盡きぬぬばたまの暗のおろもに纏はれて
花しほみ行く床の間のあやなき薫り身ましめつ、
聞くは友呼ぶしめやかの遠き蛙の夜半の歌、
流轉りゅうてんの聲と姿とに波咽び行く廣瀬河。

天地よ盡きぬ永劫の神秘のといき又おゝに

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十五

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十七

名残の春を透ひやりて愁ふ一陣夜半の風、
夢よそさわげ昨日まで色はにほひし花の窓
その窓押せば暗深く今や「無限」の影ひとつ。

萬古の光動きなき北斗よひは見わわらず、
珠貫貝聯天狼の影やいづかの空のはて、

くしき力の蔭くさるかなたに靈の邦ありや
そよに不盡の春をみて石よとく歌ありや、

あゝに愁の花咲きて涙の谷に霧晴し、

あゝに移ろふ春の世に契短き鹿ふたつ、

ひとつ跡なく消え失せて秘密のかさをくゞり行き

ひとつ名残の夢さめて永き思に沈み行く、

(六)

思よはじまる何の郷愁よ終る何の邦、

銀河のよそか星のよそか、空の海やむ雲のよそか。

千万の生、千万の死、無限の起り、無限の亡び、

かくて流星の影も消えぬ、かくて三春の花も枯れぬ

黄金の色見るめ眩む夕の雲もかくは褪めぬ、

白銀の光霜よほる夜半の月もかくは落ちぬ。

(七)

幽淵暗く億劫の生を呑み去るそはなれか

死よ青白く電光の雲間かすかに馳けるおと

塵界の中閃めきて無常をしめすなれの影、

哲學光薄くしてその神秘を穿ち得ず、

宗教迷多くしてその真相を悟り得ず、

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十七

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十八

紅雲褪めて瑤臺の曲はわが世の風と荒れ
彩虹断れて天上の春は下界の花と散り、
劫灰絶わす吹き拂ふ世々のあらしに人の子は
たゞ力無く眼を舉げて天のあなたを夢むるよ。

愁よもだせ百年の齡短し人の春、

嘆よ眠れ煩惱の力かよはし墓の淵、

穹窿高く黄金の光を凝らす神の子の

またゞく眼まなこに閉ぢおもる不言の教讀めずとも、

喜べるもの笑めるもの傷つけるもの泣けるもの

すべての上うへに下り来る平和のめぐみあゝ思へ、

あらしよ、雲よ、散る花を誘うて遠く行く水よ、

行て大空暗の中に、去りて大海波の底に

倦みし、疲れし、困みし我世の夢の旅終へよ

嗚呼夢深き人の子の悟りに遠き空のあなた、
有象の世界幾萬の群を包める空のあなた、

誰かは拒む想像のするどき羽も猶たゆき
幽玄微妙圓滿の高き無象の邦無しと、

天の光を閉ぢかくすあだなる人の屋を出でよ、

靈の光を蓋おほひ去る僧と俗との聲捨てよ、

人籟断れて暗深き夜半よるの空に佇めば

天地しづかに靈籟の無絃の琴をかなでいで

人の心の底深く聲は囁く「たゞ信」ど。

(明治三十三年暮春稿)

* 彼が大學院に於ける専攻の學科は歴史なりき。

** 昨年彼が同郷の秀才某史學を修めしものまた幽冥の客となりぬ。

曉

鐘 弔吉國樟堂

三十九

曉

鐘

破

船

四十

破船

半輪の月斜なり
 地平線上雲黒く
 形さながら世を笑ふ
 悪魔の影に似たるかな
 破船のへりを洗ひさりて
 波はむなしく立ちかへる
 波また寄せてまた洗ふ
 折れし櫓やれし舟
 語るは何の悲劇ぞや
 叫喚の名残たゞあらし
 月はすぎまししかばねの

残れる數に青白う。

自然の力、波の力

引きてしづめて海底に

ふたつの影を呑まんまで

しばしは命か猶残る

あゝ破船の姿波のあな

あゝ半輪の月波のあなた

天と

光のおほ海、色のおほうみ、

千百萬の目を集めて

熔すににたる波のかたはら

曉

鐘

天

上

四十一

曉

鐘 天 上

四十二

神人碧玉の板どりて
焔の筆に鑄るは日記か

『あした—星雲さめぬ、

太陽の光てりましぬ、

地球の泡生れいでぬ、

樂園の花さきそめぬ。

『ゆふべ—星雲なほさめぬ、

太陽の光衰へぬ、

樂園の花うつろひぬ、

地球の波は碎けぬ』と。

天上高し日ひこ日

下界幾億の歳か切か。

燕 限

あらしの鞭に花泣きて

胡蝶の夢もさめはてつ

春のひかりはうつろへど

『無限』は理想の空、高く

照りぬほゝるみぬ。

人のつぼみのおさなごの

いまはの床に母は泣く

家の光は消え行けど

仰げば理想の空高く

曉

鐘 無 限

四十三

曉

鐘

黑龍江上の悲劇

四十四

『無限』は照りぬほゝるみぬ。

尊き道の名によりて
罪なき血汐すゝられつ
教のひかりくもれども
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝるみぬ。

黒龍江上の悲劇

(註) 客の露領ブラゴエチエンスク府より歸り来るあり、就て同市
悲劇の真相を問ふ、客愁然として語りて曰く同市附近一帯の岸
は清人の屍累々として悪臭を衝き、鬼氣人を余孽ひ、慘
情としてうたゝ行人の馬を踏たしむ、八月二十日余等一行の武
市に着してより滞留殆んど十餘日、其間アイダンの燼煙は遠く
(天に連りて尙未だ止まず、一脈の黒煙は濛々として遙かに大市

邑の昔を想見せしむ、露曆六月一二の同日清兵武市を砲撃した
り、稱する跡に就て之を見るに僅か或民家の一端を損じたる
に過ぎずして露人當時の騷擾却て怪訝にたへず、軍務知事グリ
プスキイ中將は武市清人の内應を慮り、同四日一隊の守備兵を
全街に出して清人を捕縛せしめ五千餘人の老若男女を狩りて
黒龍沿岸に送り砲火と江流を以て悉く之を燬せり、武市の清
人五千、内潜伏遺棄命を全うせしもの僅に五六十人に過ぎず(九
月十九日東京朝日新聞、同廿一日ヤヤ、バンタムス等参照)

(一)

大江流れて四千露里、水は長空の影ひろく、

雲烟迷ふシベリヤの南を遠く貫きて、

末鞆粗の海に入る黒龍の流、萬古の波、

記せよ——西曆一千九百年なんぢの水は墓なりき、

五千の生命罪なくてあゝに幽冥の鬼となりぬ、

其悽慘の恨みよりあゝの岸永く花なかれ、

千載されより大江の名、罪の紀念に伴なれよ、

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

四十五

曉

鐘 黑龍江上の悲劇

四十六

萬世されより大江の線、東亞の地圖に血を染めよ。

犠牲は平和の清の民、賊は兇暴のコサツク兵、
その豺狼を狂はして群羊をかりしものやたそ、
『露軍の中將グリブスキイ』怒の波よ名をのせて
四千里遠く大江の水よ四海に奔り行け。

あゝあゝ、なんぢ、殘虐の將、虎狼の兵、
千秋何の處にかよそになんぢの類を見ん、
上帝の怒盡くるまで、大江の流枯るゝまで
その罪惡をこぼしへに萬邦の民よ皆誼へ。

皇天の光亡びずば『歴史』よなんぢの責思へ、
嗚呼鋼鐵の筆とりて正義の女神永劫の

おもてに既に記せるを君戰慄の目に見すや、
『西曆一千九百年黒龍の水血なりき』ど。

二

あゝ天がける『想像』の無象の翼身に借りて
恨も長き黒龍の岸の其日の様を見よ、
煙塵空を暗うして一隊の虎狼かけりさぬ
大江の音をよむまで見よ號哭を天におけ
老幼男女いましめの繩に驅らるゝ數五千。

同胞五千いくとせかあゝの異郷のかりすまる、
錦文ゆふべ窓に入る故園干戈のおこづれに
思いためる夜半の夢あけばのちかくおどろけば
翼ならして荒鷺はやさしき鳩の巢におちぬ、
牙を揮うて豺狼は羊の檻に襲ひきぬ。

曉

鐘 黑龍江上の悲劇

四十七

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

四十八

六軍の王師賊なりき軍旗のほまれいづれぞや
 掠奪つきて驅られ來し清人五千途いかは、
 大江の水、天ひたすお、黒龍の岸のうへ、
 まなぶ焔に燃わひかる虎狼ひとしく吠わ立てぬ。
 『平和を破る清の民、ごく江を越わ郷に行け』

群鴉亂れて雲に入る翼はあはれ彼もたじ、
 舟やいづお、橋やいづお、清人泣きて訴へぬ、
 『順良の商估清の民、いかで平和の敵ならむ、
 流は墳墓、大江の逆捲く波を君見すや』
 虎狼涙に和がじ、露人の答たゞ砲火。

いかづち落ちぬ、白日の光は暗と消わ失せぬ、
 天の万象あどく、怒のあらし吹きさりぬ、

雨か彈丸の空飛ぶは、夜か硝煙のうづまくは、
 伏屍は岸に山を積み、溺死は江に水せきて、
 聞け、號哭と叫喚と、天地は今か修羅のちまた。

恩愛の父子手を取りて奔流の波にさらはれつ、
 新婚の夫妻抱きあひて虎狼の兵に屠られつ、
 泡の大水に消ゆるおど糞のあらしに散るがごと、
 薬の猛火に焼くるおど蠟の焔に熔くるごと、
 『正義』よ悼の罪なくて逝けり平和の民五千。

三

江流逝きて波暗し浮べるかばね今いづお、
 去れよ四千里わたつみの底は露人の影なきに
 去れよ長鯨汐を吹くあらびは彼にまさらじを。

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

四十九

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

五十

岸のしかばね青白く鉛に似るを誰か見る。
齒をくひしり虚を握み砂泥にまみれ血に汚がれ
天を仰ぎて例れ臥す惨憺の姿たれか見る。

綾羅ひとたび紅の花を包みし袖いかに、
銀鬚きのふは幼子のるみを迎へしおもいづれ、
無垢はさながら白蘭の蕾に似たる魂いづれ。

其さま見じと「夕ぐれ」はおもてを掩ふて過ぎさりぬ、
「夜」よ、あらしに吹かれきて暗のあろもに彼を蓋へ、
陰火乱れて嗷々の魂は恨に堪へざるを。

千秋ほかに比なき悲劇のあとばかりなりき、
いざや陰府の火を逃れ血汐の壺を傾けて、

サタンよ祝せ、人の世になんちのよさし尙盡きす。

四

万馬のひづめ飛びちかふ兵戈のあらびいくたびぞ、
教徒の怒り血に燃わて倒れし犠牲いくばくぞ
さはれ千歳何の時(歴史は知るやわれ問はむ)
神を祟むる大帝の六軍の師故なくて
羊に似たる外邦の五千の民を屠れりや。

見よ幻を天の中、銀鬚かやく一巨人、
無限の光胸にあり、鮮血のあと足にあり、
「われ東西の文明の光を一にあはしてき、
露人の罪にわが最期あゝかくまでに汚れぬ」、
「たそやなんちは」彼答ふ「十九世紀の霊を見よ」

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

五十一

曉

鐘 黒龍江上の悲劇

五十二

軍殿のよる静かにて星斗まぶたの重きとき、
錦繡のとばり暗うして香のかすかにくゆるとき、
高塔の鐘しづまりて侍衛の夢の深きとき、
東亞の領のおどづれに寶冠びとつひれふして、
その民のため國のため罪を萬軍の主に謝せよ。

五

嗚呼五千の靈、清人とかれ生れしや何の罪、
彼牛羊に劣りしや彼禽獸に類せしや、
覆載の恩、故ありて送物彼に拒みしや、
ききは一たび無知の暗、頑冥の夢さめやらず、
血を宣教の二師に染め罪に一州の地を替へき、
いま朝政のかげもなき國歩のなやみ時の不利、
『同胞五千罪なくて異郷の暗に魂泣く』と
李士いづれの處にか彼はた冤を訴へん、

嗚呼北極よ、南極よ、万邦の民の良心よ、

基督敎の道徳よ、十九世紀の文明よ、

告げよ——皇天の正義今無きや。

六

世界の義人聲なきや、爾の耳は聾ひたりや、
基督敎徒たゞざるや、四海同胞の訓いづくぞや、
普天の詩人綱鐵の一絃すでに絶えたりや、
かれバトモスに現はれし幻今は跡なきや、
さきにシオンに照りいでし光は暗に沈めりや。

人種のはだの白か黄か、差は愛憐の妨か、

神にふたつの道ありや、愛にふたつの別ありや、

『愛の敎の』の民罪なきわれの血を流し、

愛の敎のほかの民皆そのわざをよしとしぬ』

曉

鐘 黒龍江上の悲劇

五十三

曉

鐘 黑龍江上の悲劇

五十四

異教の民の訴をわれ願くは聞かざらむ。

その雙槍の訴を無情の耳にきかむ前、
震へる魂よ、ひれふして高き至聖の名を思へ、
時は遙けしいにしへに返る一千九百キ、
橄欖山の夜半の暗にあらしも泣けるゲッセマネ
そゝに愛の盃うけて祈りし影をあゝ思へ。

七

嗚呼事終り罪なりぬ千秋の悲劇かく過ぎぬ、
なんち無象の羽かるき黒龍江の岸の風、
九天のあなたセラヒムの萬軍の列かきわけて
咽ぶ銀河の波と共に永く露人の罪鳴らせ、
なんち滄溟の水に入る黒龍江の波の音、
五千のかばね葬りし流の響たねずして、

四海の濱にとあしへに高く清人の冤を呼べ、
七星北斗十二宮、夜半の光滅びずば
神人共に憤るおの兇戾の罪しるせ、
冤を憐む百世の義人、なんちに聲あらば、
東亞の圖上大江の線を血汐に染めていへ
『西曆一千九百年黒龍の波かゝりき』と。

登 高 賦

玉露しづかに降り來て乾坤あゝに秋を見る
歳は明治の三十三、西曆まさに千九百、
大虚のおもて永劫の上人界の争未だ盡きじを。

さはれ見よ萬古の眞、自然の色はとほに澄む、
天地蕭森の氣を湛へて山川速く書圖を披く

曉

鐘 登 高 賦

五十五

曉

鐘 登高賦

五十六

五城樓外西丘の夕、思は縹緲の空に入る。

あゝ今江山秋に入るその秋の精、秋の風、

吹くか星斗の震ひ動きて靈の如くに消ゆる空より、
大虚の呼吸清く遠く空に搖曳の雲を拂うて。

星雲の影はほらんとして銀漢の波咽ふほどり、

天上秋の光引て今搖落のわが世に下り、

遠く鴻雁の列を誘ふて下界の山河いづれを經るや。

楊柳の岸かげうすくセイヌの流咽ふ處、

菩提樹畔の逍遙の群も夕に消ゆるほどり、

弦月旗はしづむボスホル海峽の暮、

牧笛聲は愁ふ中央亞細亞の野、

行てシベリヤ大荒の東、黒龍の水万古咽んで、

神人共に憤る蠻旅の罪をかたる處、

去りて黃海の波を越ね、長白山の雲を拂ひ、

更に遙に扶桑の空に玲瓏清き富士のたかね、

其影やをす東海の名も清見瀉田子の浦、

鏡とすめる波のおもに秋をしらして過來しや。

白蘋の州紅蓼の岸、漁翁の夢の清き處、

鮮血の流屍躰の岡、文明の鬼の狂ふ處、

山川風土互に替る大地の旅幾千里、

玉殿のゆふまぐれ醉生の夢を驚かし、

落葉の夜半の窓詩人の情を動かして、

中天搖曳の雲と共に吹きさり吹きさくる無限の秋風

曉

鐘 登高賦

五十七

曉

鐘 登 高 賦

五十八

五城樓外西郊の夕、その秋風の聲に色に
 高きに登り眺めやりて獨り悠々の思つきず、
 英雄の羈圖猶あをこむる廣瀬の流青葉の森、
 水は寒山の影をひたして溶々遠くはしるあなた、
 碧は深し万里滄溟の水、其波を越わ海を越わ、
 行くく、吹て雲を拂ひ思を誘ひ詩を含み、
 天地の呼吸清く遠く無限の旅を追うて進まん。

千叢のすゝき波を乱して滿山の秋今まさに深く、
 夕陽いつか西に入りて餘光の遠く溢るゝ處、
 山河自然の雄麗に寫すは天上無窮の榮か、
 その雄麗の景に對し、其の清冷の風に吹かれて、
 思は長し氣は遠し、——塵骸しばらくは聖かれよ。

人間歴史ありてより星移り行く五千歳、
 進化のあと短くて禽獸の域遠からず、
 一塊の地球今も猶たゞ反哺のにはとして、
 愛の權化の教の祖基督世紀第十九、
 その最後の秋風はあゝに悲哀の曲と吹く。

詩人哲人いくたりか我世にいで、道説けける、
 靈鷲の峯に法の歌、橄欖山に愛の聲、
 オレブ、シナイの嶺の上、アラビヤ、ベルシャ野の邊、
 光は暗にかゝやきて名あり言あり道ありき。
 遺流千年遠くして今聖壇の焰消わ、
 博愛の教悼むべくたゞ吞噬の具となりて、
 虎狼みだりに滔天の罪を文明の名に犯す。
 妻は汚され身は斬られ國は削られ屋は焼かれ、

曉

鐘 高 登 賦

五十九

天を仰ぎて血に咽ふ民よ「異教」は何の罪、
 大義を叫び唱ふべき輿論の聲ももだせるか、
 良心の麻痺に耳聾ひし基督教徒何の名ぞ。
 美妙の天地かくて猶たゞ流血の場として、
 世紀最後の秋風は悲哀の曲と吹き去るか。

嗚呼おほいなる無窮の靈、
 天を張り、海をのべ、雲を巻き風を吐き、
 日月を驅り山嶽を震ひ、
 千萬の星を鑄て千萬の世を治め、
 風にありて吟じ人にありて歌ひ、
 花にありてゑみ、星にありて照り、
 俗僧遂に悟らざる、迷信遂に汚さる、
 宗派おのれに占め得ざる、空理ひとへに知り得ざる。

愛の神、進化の神、詩人の神、
 爾の胸にわれよりて爾の靈にわれ祈る。
 合理必ず現實に、現實必ず皆合理、
 有情の天地いつまでか常に混擾の局として、
 人種の差異に同胞の四海の愛を壊るべき。
 爾の呼吸願はくは天のはてより地の隅に
 吹き來る無限の風として禍惡悉く吹き拂ひ
 光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ、
 世紀新に替る後秋風愁の曲ならで
 あらしの聲も天上の無窮の樂とひやくまで。

ア の 窓

鐘のひびき、水のひびき、
 うするゝ光、うするゝ烟、

曉

鐘 夕の姿

あゝ別なり夕の姿。

しづまる風、收まる雲、

睡る花、覺むる星、

あゝ別なり夕の姿。

無韻の歌、無窮の歌、

無聲の樂、無限の思、

あゝ別なり夕の姿。

あゝおさなおが甘き乳を

愛を湛ふる母の胸に

頭をよせて眠ふる如く

『夕』のあろもの裾のひだに
浮世の煩ひ浮世の惱み
つゝみて静かにわれは休まん。

おほいなる手のかけ

月しづみ星かくれ

あらしもだし雲眠るまよなか

見あぐる高き空の上に

おほいなる手の影あり。

百萬の人家みなしづま

煩悩のひびき絶ゆるまよなか

見あぐる高き空の上に

おほいなる手の影あり。

曉

鐘 おほいなる手のかけ

不 朽

フイルドーンは西曆九百四十二年波斯コランサンの一市チウフ郭外に生る大王マームード
 四郊を糧食し威名を中央亞細亞に掲げしがまた文物典章を重んじて。ガズニの都に廣く學藝
 の士を集め、一朝フイルドーンノ大才を認めて彼に優詔を下し、波斯古來の神話傳の逸聞歴
 史等一切詩化して列王。英名邦家の偉蹟を不朽ならしめんとし、約して曰ふ子が詩作一斷行
 六に二「トマン」(八圓餘の金貨)を以てすべしと、詩人其の命を受けてより憐愍の意匠を凝す
 六三三三三、六万聯行「イリアット」の約七倍の大作を作り「列王詩紀」一題して之を王に
 獻す、大王よりて約せし金貨を與へんべしに、倭人ありて之を阻め、金に換ゆるに銀を以
 てし、之を巨象の首に載せて詩人に贈らしむ。フイルドーン王の欺騙を怒り、蒲坂の遊貨を
 分ちて悉く僕婢々與へ。孤身飄然都を去りてまた歸らず、しばらく浪々の生を送りしもの故
 山に歸りて形影獨り相用ふのみ。白髮の詩聖歳已に八十餘、十王後にいたりて悔甚たしく、
 百圓の譯五十圓の駱駝に金銀珠玉家具服飾食品食料一切を積み、更に十二頭のアラビヤの駱
 駝に十二人の強壯敏捷なる黑奴を添へ、侍臣に命じて行きてフイルドーンに贈らしむ、行
 程八日としてチイメに着し、城の西門に入るをたまふ東門を出づる哀哭の列あり是フイ
 ルドーンの葬式なりき。

ハイ子嘗て之の題目を「ロマンチエロ」ロマンチエロと記し、左の一語も其の史蹟を基とす、篇中引
 川のソーラフ、ソムナム父子がオクサス河畔の戦は耶王詩紀中尤も沈痛なる一節なり

(一)

ガ | ン | チ | ス | の | 大 | 河 | 流 | れ | て
 五 | 天 | 竺 | へ | だ | つ | る | か | ぎ | り
 大 | 王 | の | 御 | 稜 | 威 | の | 光
 カ | ス | ビ | ヤ | の | 海 | に | 波 | な | く
 ア | ラ | ビ | ヤ | の | 漠 | も | ま | つ | る | ふ | 。

妖氛の晴れ行くあした
 そゝぎくる四海の富に
 王城は春の世盛り
 並び立つ七寶塔は
 紫の雲に沖りて。

落日の焰收まる
 玉殿の夕のうたげ
 玉盃の数を重ねる
 君王のおもわ照して
 三千の花のともしび。
 白日の光る胸より
 ぬばたまの暗の生るおこ
 歡樂の極みより湧く
 かなしみの黒衣の姿
 あゝ王者なれも塵なり。
 波たちし歌吹の海の
 名残今あらしに紛れ

「チゾレヌ」の森の蔭より
 悠揚の悲歌のひとふし
 『ソーラプの最期』を謠ふ。
 弦月のかすかの光
 オクサスの岸をや照す
 英雄も末は黄土か
 マーメイド頭を垂れて
 露しげき御階にたゝす。
 紅血のうしほの流
 湧き起る臍に鋭針を
 貫ける痛も斯くや
 哀吟の節に答ゆる
 大王の胸のゆらめき。

けたままし御苑の孔雀
金縷も今は暗なる
夜深きに何の夢見る
星ひさつ空に流れて
曉に近く魂あらむ。

『千載のむかしのほまれ

ラスタムの非命の子の名

千秋の後に傳うる

入神のたぐひなき歌

彼なりきあふフィールドン』

『われや王、かれや詩の聖

汀なる巖をうちて

荒波の碎くるがあと

争ひし二つの心

われどかれ、あふフィールドン』

『絶崖をひたに落して

觸るるもの碎かざるなく

おとし来てわれも碎くる

大巖怒もしかぞ

罪深し王者の狂』

『おも疵になする『バルザム』

焦土にそゝぐ夕立

わが悔の量をあらはす

千萬の寶集めて

慰めむ老のいまはを』

(三)

邊城のあしたの夢を

曉

鐘 不 朽

七十

警蹕の聲に破りて
くれなるの旗を真先に
野路遠く塵を亂しつ
幾百の驃馬に駱駝に
積みのすは何の寶ぞ
群を驅る御者の聲ねも
暖れぬ八日の旅路。

紫はシドンのたくみ

紅はタイルの錦

乳香と蜜と没薬

百の瓶「ナル」の油

ベンガルの沖の底より

拾ひしや緑の眞珠

オヒールの深き山より
穿ちしや濃藍の玉。

大漠の星夜の空に
たてがみの露を拂ひて
風と飛ぶ十二の駿馬
亞非利加の岸をはなれて
身のたくみ仇と賣られし
漆なす十二の黒奴
率ひさり率る來りて
除向ふいづの果ぞ。

(三)

澄みわたる心の空に
かゝるべき雲は今無く

曉

鐘 不 朽

七十一

曉

鐘不朽

七十二

しづむ日を故郷に眺むる
白髮の詩聖のおもむ
靈の火の光に照りぬ。

天上の火輪の焔
天漢の名殘のしづく
破壊の「時」力合せて
碎くべし七寶の塔
破るべし帝王の宮。

ひとりのわが建ても詩の城
千萬の人の心に
基おく靈の大殿
千載の末を待ち得て

光のみいよゝ増らむ。

三十の春また秋に
織りつぎし錦繡の段
六萬の聯行の文字
とあしへに世々の光と
万邦の民は仰がむ。

塵寰の富にほまれに
煩惱の夢に迷に
大王の笑に怒に
いにしへはわれも狂ひき
今はたゞ靈のよろあび。

曉

鐘不朽

七十三

曉鐘不朽

七十四

昇るにも猶もいやます

落日の比なき影

燦爛の無垢の淨光

照せわがいまはの姿

フイルド！シ世の業をへぬ。

(四)

チウスの城西の門より

「おほいななりアラ！の徳」と

百の聲ひとしく叫び

乱調の樂のひびきに

千万の寶護りて

大王の使進みぬ。

東の門今過ぎて

咽び泣く笙鼓のしらべ
「休あれ逝ける魂に」
祈りのゆく黒衣の列
錦織の榮をよそなる
木棺にあゝ大詩聖。

露 露

(日本海々戦歌の一節)

海なり晴なり夕べなり。

夜摩天上の琉璃の宮

黄金の塔瑪瑙の樓

鏤ばめ粧ふ百寶の

色を、微妙のひらめきを

東海今見る春の榮、

曉鐘露露

七十五

千波萬波のゆらめきに
鷗の羽も染まるまで
水平線のひくきわみ
一面さながら虹霓の
爛と溶くるわだつうみ。

層樓の粧。天の一方
崩れて波に入る如く
その波染むるくれないの
あとも流轉のうたかたや
漣漪は眠る花に似て
次第におむる霧の海
聖殿深く錦繡の
帳のおほふ大鏡

中に籠れる靈ありて
夕しづかに立ちあがり
未來の命を宣ふごとく
莊嚴神秘の影凝らし
うづまく暗に隠れ去る
大海原のしづけさや。

暗濤へだつる三百里
潮あしたに合すべき
二つの水師、西、東、
一つ黄海の沖の南
懸るは『破壊』のとき劍
一つ對馬の沖の上
近き笑むは『光榮』か、

渦卷く潮吠ゆる波
 呼びぬ「戦今近し
 龍王ちひろの淵出で、
 鯨鯢百千の群狂ふ
 あらびにまさる跡見よ」と。
 渤海遠き北の天
 波いま眠る旅順口。
 あらしも冰る冬二月
 八日夜半の波切りて
 電光の羽雷艇の
 飛びしおのかたいくそたび
 鬼神も泣ける壯烈の
 跡ぞ、陸には武の權化

節は稜々の秋の霜、
 紅顔並びて地に倒れ
 白髪ひとり影を弔ふ
 恨それはた國のため、
 仁は春風の花の恩
 卒を見るとき
 將軍血に泣く夜々の思、
 卒や幾萬焦熱の
 現世のよみに飛び入りて
 虚空をおほふ炎々の
 鉛の雨に倒れしや、
 嗚呼光榮は虹霓か
 照るは涙のしづくより、
 盤龍の山、松樹の山

曉

鐘 霹 靂

八十

白玉の山、鶏冠の山、
 鐵血山の形替わて
 青燐白骨夜半に泣く
 悲憤に買ひし天の險、
 その港口今ねふる
 鋼鐵の巨骸夢いかに、
 暗濤かすかに聲ありて
 半^{なまは}しづめる舟縁に
 告ぐるやいかに、「寄せ来る
 千里あなた^の艦舳の
 爾の友も命盡く」ど。
 * * * * *
 北斗頭上に影高く
 ネワの大水よどむ岸

曉

鐘 霹 靂

八十一

冬宮夜半の夢成らず、
 香霧みなぎる紅繡の
 とばりの中に薄命を
 悼むは誰ぞや、玉冠を
 のする頭の重しとも、
 十字架暗き大寺の
 塔の頂鳴りわたる
 鐘は叫びぬ「光榮は
 われの響の時の數
 時もろともものうつろひ」ど。

ペテルおのかた二百年
 龍攘虎搏日も足らず、
 ヤーヌス百の目を張りて

遙にひとつ東に
 延びし雄略黒龍の
 あした鐵馬は渴知らず、
 夕雲巻く長白に
 飛ぶ雙頭の鷺の旗
 その旗風に鴨緑の
 流も遂に波立ちぬ。

何ぞや彈丸黒子の地
 みだりに螳螂の臂あげて
 われの龍車をむかひ打つ、
 ウラルの嶺の森にして
 手だれの木あり百鍊の
 斧に小枝を拂ふおと、

ネフの春波みなざりて
 残る氷を沙あらぶ
 北海遠く流すこと、
 民は一億帝領の
 雄師ひとたび地を蹴なば
 東夷忽ち伏すべくと。

望は夕の空の虹
 むなしく青にとけ行くか、
 『ツエザレキツチ』レトキザン』
 夜半の轟雷碎き去り、
 鴨緑の固南山の塞
 その日をおへず落ちてより
 百戦つねに我に不利、

東亞の覇府とまつるへし
 金城湯池仇の手に、
 遼陽奉天十万の
 肝腦ひこしく地にまみれ、
 列世の略大露の名
 むなしく夢と消に去るか。
 あらしの沖のたゞ中に
 破船の水夫狂はしう、
 分秒ごとに沈み行く
 甲板の波あらければ、
 半碎けし帆柱に
 今はとよるめき攀づること、
 最後の望あゝ爾

殘の水師ひつさげて
 クロンスタトの水門を
 怒潮もろとも乗りいでし
 あゝ魯提督いやはての
 頼なんぢの跡思ふ。

リバウの岸に玉の輦
 龍馬あらしに泡嚙みし
 昨日は未だ「アウロラ」の
 光の影は没らざりき、
 鼓樂は空をゆるがして
 三十餘艦と軸と
 脚みし鐵の「レビアタン」、
 あら波切りてのりいでし

曉

鐘 霹 靂

その運命のはて思ふ。

八十六

運命がれの手をひきぬ
 潮路遠し一萬里、
 水師わかれてそのひとつ
 波は湯と湧く赤道の
 圓をあなたに外の極、
 十字の星の影のもと
 亞非利加南の岸めぐり、
 ひとつつ歐亞の間の瀬戸
 東に越して地中海、
 長江スエスの水おそく
 千里むかへる兩岸は
 共に「シムーン」のある郷、

遙に熱沙吹き送る
 紅海の波つんざまつ。

いづれ南の極の天、
 山より高く立つ波に
 十丈直に空を突く
 巨櫓の端も雨にして
 甲板望臺みな潮、
 潮に涵り吹きあらぶ
 貿易風を真向に、
 雷鼓轟くわたつみを
 過ぐれば東亞空近く、
 安南の沖夏五月
 五日みどりの波のうへ

鐘 霹 靂

八十七

分れし水師めぐりあひ
鼓樂ふたゝび空ゆりて
艦隊ひとしく「ザア」の名を。

世界あらたに目を張りぬ、
たそ成敗のあげつらひ、

曉清きあさ波に

照す雙鬢霜經しや、

なやみ海より深うして

一萬里外艦艦を

率ゐしほまれ朽ちせざれ

「敵いま近しあゝ奮へ」

一死なんちの邦のため」
邦の望を大帝の

勅を身に負ふ大部督、
バタンの瀬戸を後にして

北斗星より夜々高く、

臺灣ひがしの海峡を

乗切るのちは支那の沖、

布かれし係歸か運命か

秘密の手あり彼引きて、

幕地向くるいやはての

關門あなたのだ對馬沖。

白羽虚空をつんざきて

的に射集む矢の如く、

百川どもに東海に

溢るゝ水を入る如く、

曉

鐘 霹 靂

九十

世界ひとしくあゝに目を
 注げ、滄溟波生れ
 暗また光輝沌の
 胎より出で、わたつみの
 夜と晝との天傾を
 わけしおのかたおほいなる
 海の戦近きぬ。
 緑波白浪風驅りて
 地中海より直西に
 注ぐ大西洋の端
 怒潮となりてうづく塹、
 波上の偉人（大英の
 東郷）かれのいやはての

曉

鐘 霹 靂

九十一

ほまれトラファルガーの水
 水は遙に今呼びぬ、
 『太平洋の波の友、
 百年新に廻り来る
 光榮なんぢの領の上』と。
 * * * * *
 裾三州の野にわたたり
 肩を紫雲の外に抜く
 山か、提督まじるかす、
 龍泉太阿魔を碎き
 千將莫邪妖を割く
 斷は久むく定まれど、
 重きをになふ雙の肩
 霧たちおめて妖鯨の

暗に逃れん憂より
胸や千仞わたつみの
底をかへして湧きあがり
九天の碧ひたしうつ
波は思とみだれずや。
有象の海にあらしあり、
更に優れる心海の
憫無象の荒るゝ波
憫は常に聖なるを、
天地をおほふいさをしを
讃せん前に嗚呼思へ
千載つねにおほいなる
憫に因りておほいなる
人と靈とを見るべしと。

空も苦惱の暗晴るゝ
此日五月の二十七、
遙かに沖の遠きより
妙華の春のおとづれは
歎呼とゞろく波のうへ
無線の電に馳けり來つ
提督起ちて一命を
傳へて抜ける千鈞の
鐘のしづく三十里、
空は晴るれど海あらし
怒濤を蹴りてまつしくら、
運命いづれ生か死か、
撰いづれを厭はんや、

曉

鐘 霹 靂

光榮ふたつの途に共。

九十四

鳴呼日本海夏の波
 山とたちくる對馬沖
 上の無象の海にわく
 時劫の潮また捲きて、
 東西おゝにふたつの奥、
 一つにまじる大波瀾、
 時やまさしく糧原
 邦のもどるのたちてより、
 春秋互に移りくる
 二千五百六十五、
 おほいなるもの、高きもの
 つねに満つれど目に觸れず、

曉

鐘 霹 靂

ひどり神秘の名によりて
 暗にひらめく電光の
 ただ一線を世に洩す
 靈いまあゝに三萬の
 身となり血となり肉となり
 水師となりて鑄鐵の
 生けるがなかにたつを見よ、
 銀浪捲きて雪散りぬ、
 汐は矢と射る東水道、
 見よ今煤烟おくうに引ける
 艦艇つづく幾湮
 末は濛氣に包まれて
 露軍まさしく沖のあなた、
 『皇國の興廢おの役に

九十五

曉

鐘 霹 靂

九十六

懸る」たてたて、嗚呼壯士、
たちて扶桑の精凝れる
威武を世界の目に示せ。

二萬の馬力潮蹴たて
甲鐵ひとつの脈ゆらぐ

『三笠』敷嶋『富士』朝日、

時はいたりぬ、威怒の靈

十有二寸の砲の口、

今雷霆をとどろかせ、

『春日』日進』あらたなる

力妖魔の膽を裂け、

九千餘噸の装甲を

並べ波さく六の艦、

『淺間』常盤』の霹靂に

『吾妻』八雲』の威を麗へ、

『出雲』磐手』の切る猛火

未來の仇も震ふべく

金鐵粉と散らしめよ。

硝煙爆煙うづまきて

白日忽ち暗となり、

風輪狂ひてその暗を

忽ち拂ふ對馬沖、

強弩三千沙を射し

むかし何等のたはむれぞ、

鉛のあらし火のあらし

湖のあらし吹きあらぶ、

曉

鐘 霹 靂

九十七

曉 鐘 霹 靂

南壹岐島沖の嶋、
北鬱陵竹の嶋、
天地はあげて百圍の
焔に狂ふ霹靂車。

飛衛の規切りはなつ
降魔の巨彈乱れ落ちて、
尺餘の鐵板蜂の巢ど
碎かれ沈む『オスラビヤ』、
今また暗は先んずる
水雷砲火に威を添へて
進むさなから矢の如く、
『ボロヂノ』『スワロフ』先王の
名を負ふ友と相次ぎて

曉 鐘 霹 靂

溶くる千俣の波の泡、
星は暗なる海のうへ、
探海燈のすさまじき
光めあてに碎かるゝ
『シソイキリキイ』『ナバリノウ』
あゝる日降る運命を
暗の大潮捲き返し
流す『ニコラス』『アリヨール』

暗の大海暗の波
暗たゞ獨りあかしのみ、
鯨鯢下に駭きて
鬼神壯烈にために泣く
いさをの數を擧げ得んや。

雲蒸長く時ありし
二千餘年の國の粹、
一兵一士おどごどく
『勇の權化』と奮ひしを。

あゝ魯提督、一掬の
涙を君に捧ぐべく
扶桑の民に心あり、
波また波の一万里
東半球を横に斷ち、
雨にあらしに狂ひ立つ、
潮の山に半歳の
辛酸つゆも報はれず、
精を盡くせし鋼鐵の

三十餘艦、一萬の
水師をのせて悉く
みな龍王の犠牲か、
敵の一艦しづめ得ず
武運拙く捕はれし
君勇なしと曰ふは誰ぞ、
たゞ赫耀の朝光
妖雲拂ひて日の昇る
大東洋の東郷の
おもてに立ちし薄命を
嘆げあゝ名は日本海
曠古のほまれ傳ふべく
十億五州の民おどり
胸のゆらぎを高くして

曉

鐘 霹 靂

百二

おとづれ待てる双の耳に
 飛電のたよりかけり行け、
 あゝ鵬の羽をのす處
 あらしの海に戦争の
 ありしおのかた至高の名、
 丈餘金剛の筆とりて
 黄金の巻に刻むべく
 世界歴史の靈よ起て、
 今「光榮」は純白の
 もすそを風に飄へし
 波の緑の月桂の
 冠さゝげて微笑むに、

書はし

富嶽之歌

呈

夕をかざる玉鈎の一擧遠く消沈み
 暗人間の世に落ちて今は壺中の夜もなかば。
 有聲無象の窮まりはあゝ穹窿の空の上
 數も千万永遠の姿を凝す星の花
 わが射る光途遠く流るゝ末を見おろせば――

曉

鐘 富嶽之歌

百三

曉

鐘 富嶽之歌

百四

影朦朧のたゞなかに西崑崙の雲の嶺
冷煙おほりうづまきて泰山暗し鬼神の府
羅浮天台のおもかげも今は下界の暗の底。

千里二千里三千里烟波眠れる東海の
うな原遠く眺めやわれらの光さすごある
渾沌の世に湧き出でし姿不變の富士の嶺
太古の雪の膚清く暗を照して立てるかな。

あらしも今は收まりて人籟絶わぬさらばいざ
光と共にわが露を、露もろともにわが歌を
下だし送らむ仙嶺の頂遠く裾廣く。

露

光合みて珠とあり珠とあほりて露と呼び
暗にもしるき香を添うるわれ銀臺の星の精
長松の蔭暗うして鶴の静かに眠るとき
幽谷のあらし収まりて蘭の微かに匂ふとき
西に傾く銀漢の流の末と下り行く。

行くへは遠し東海の波まに近き富士の嶺
嶺に下れば白銀の、また黄金の水潜へ
麓に布けば花のへに帝郷の夢もの語る。

嶺と明水

珠貫貝聯かけ凝ほり玉露となりて嶺の上
千古の雪のしたゝりも交へ満ふる水かゝみ

曉

鐘 富嶽之歌

百五

寫る光は仙嶺の夜半はなの星のおほる影
酌みて飛仙の盃の沈淫の味思ふべく
餘滴靜かに谷あひに玉と碎けて走りては
行末遠く香を浮けて麓の花を誘ふべく。

花

高ねおろしの夕かせに
われ咲き匂ふ花の子ら
あよひ御空の友そゞぐ
戀のしづくぞ身にしげき。

見渡す廣き八州の
裾野の夜も靜かなり
かしらを垂れて行く水に

さゝやく思人やしる。

あゝに開きてあゝに笑み
あゝにしぼみてあゝに散り
過ぎし幾春幾千とせ
自然の子らと友なりき。

御いづかしおきみあの手
かざすつるぎに散る焰
夷滅びてすめろぎの
よさし廣みし世もむかし。

時おし移り紅に
白は替る旗の色

曉

鐘

富嶽之歌

君が裾野の狩りくらの
たけき競ひし様もまた。

百八

春のつばくら秋の雁

いそぢの驛の行返り

振ふ錦の花の袖
うつつろひ行くもきのふにて。

いつしか布かる黒がねの

道に近づく西ひがし

烟あらしになびかせて

火輪かけかふ世の姿。

時は移りぬ人去りぬ

時

獨り裾野の花の子ら

替へぬむかしの香をどめて

胸にはつゝむ歌絶わす。

あよひしづくの身にしげき

御空の星の戀の歌

受けて傳へて行く水に

さゝやく思人しらじ。

流

銀蛇幾すじ幽谷の泉しづかに集りて

ねは玲瓏の玉いくつ碎けて走る夜の空

西と東のいさら川流るゝ道に呼びつゞへ

靈山の名を身に負ひて下るも長し六十里

曉

鐘

富嶽之歌

百九

曉

鐘 富嶽之歌

百十

けさは浮べぬ白帆かげ夕は洗ひぬ汀の日
今はた誘ふ一ひらの花にのせ行く星の夢
わだつみさして道遠く行けば流れん時も世も。

海

潮は通ふ東海の流みなざる三千里
銀山碎け飛散りて行くへ四海の沖はるか
経緯度替るもゝの岸洗ひて歸る千重の波
波に明珠の影鑄りて光は震ふ星の色
いさりび時にはのめきて煙は迷ふ清見潟
夜深き岸の松が枝に仙女の樂は響かねど
あゝに流の送り來し花に無限の春の歌
あしたの光照りもせば我も自然の樂かなで
扶桑の鎮め靈山の姿を波に涵すべく。

其影宿す万項の東海の水下に見て
高ね下りし夕あらし無象の翼身は軽く
北斗の影も見ぬまで波路はるけし幾千里
椰子橄欖の香にはほふ南溟の空吹拂ひ
暖潮の蒸すむら雲のむらがる友をいざなひて
今よそ歸れあけぼのゝ空合近き富士のもど。

雲

歳のなかばは夜の暗暗に替れる紅血の
日に氷山の影ゆるぎ波もあらしも凝ほり行く
千古の冬の北洋の眺さびしき空の上
万里を翔くる鵬の羽を忽ち借れる自在の身
南をさして馳け行けばよもより集ふ友の群

曉

鐘 富嶽之歌

百十一

曉

鐘 富嶽之歌

百十二

率ゐて寄せん東海の芙蓉の峯の空近く。

詩 神

はやも下界の空しらむ時風雲のいざよひに
天地創生のあさばらけ昔のあとぞ忍ばるゝ
暗逃れて旭陽の光はじめて照りしとき
四大おのゝ其則に就きて渾沌の去りしとき
われ九天の水引て東海萬石の波湛へ
玉闕の柱つんざぎて芙蓉千仞の基おきぬ。

天地の間靈岳の氣に清風の吹てより
黃鶴露を吸去りて秋白帝の樓に飛び
青鸞花を啣み來て春瑤臺の仙を乗せ
彩雲永く一帶の天衢に通ふ路引て

神韻妙詩おのづから嶽に收まる數千秋、
此邦いまだ此山を歌はん聲はあらずとも
玉露明星もろともに永く宇宙の靈に聽き
花萼川流とたしへに中に不朽のしらべあり。

嗚呼東海の君子國、史は百王の跡遠く
二千餘年の春ふけて斯文の華の遅くとも
香はかんばしき千載の未來の望無からんや、
群巒遠く下に見る芙蓉の姿雲の膚
清きは民の心たれ高きは民の思たれ、
積水淵を湛へてはうち蛟龍の湧くがごと
積巖山を築きてはかみ風雲を捲くがごと
長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて
天地無窮の「美の靈」に民の融化し入らんとき、

曉

鐘 富嶽之歌

百十三

曉

鐘 富嶽之歌

百十四

扶桑の俗を改めて八朶の芙蓉比なき
影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なんとき
其時今にほのみせて靈山の空明けわたる。

見よ萬頭マンズの海鳴りて波黄金の花開け
紅雲ベニクモ錦ニシキの粧マツを凝らす朱陽アカヒの曙アサの色
希望キバウの光ヒカリうらわかく峯ミネ千秋チウキウの雪ユキに照り
愛アイと句コトと聲コエと皆みなひとつなる天上テンノウの
無限ムゲンのほまれはの見ミする富士フジのたかねのあさぼらけ。

(註) * 弦月のささ

* * 富嶽の頂上金明水ニシキ明水アキラあり

* * * * 星のささ

* * * * Beyond the starry dome, in realm of the blessed, Love,
Music and Fragrance are the same. — Anon.

曉

鐘 終

附 録

汀互の道遙 (ニーゴウ作)

第一 道遙

すざましき潮の底の渦巻の、
秘密の淵より湧き出で、
みどりの波のたなかに、
泡沫のあらし雪と碎けぬ。

此飛沫の淵より神は何を造り給ふや、
曙の光りはあゝに何を注ぐや、夕の曙に何かあゝより出るや
海はあゝに注ぐいたづらに其波を、
雲は其霧を、あらしはその響を。

曉鐘附録 汀上の道遙

百十五

あらしは其響と共に潮は其泥と共に過ぎさりぬ、
漁人の恐るゝ旋風は
あつものすおき淵の中に現はれて
常に同じ場と同じ沫を保つ。

漁人は語る「かしまに尊き波の上に、
失せたる幼子は降誕節の夜を待ちて
人界に汚れし其翼を清めんと來る、
天便となりて天上に飛去る前に」

われは曰ふ「神は潮の先に絶壁の先に
かしまにかく白き清らの地をおきぬ、
おほいなる自然の胸の中
惡のたゞなかに善の姿たらしめんため」

第二 逍遙

海には泡、陸には沙、

みぞりの中に黄金の光は白銀の光と混じぬ、
あれは洋々たる大氣のひびきをきく
遂に沈黙におほはるゝ遠き大なる響をきく。

眠く海の岸にひとりの幼子は歌へり、
何物もおほいならず、何物もちひさからず、
神は創造の上、受造の上に
同じ黄金の星と同じ緑の大空とを置きぬ。

われらの運命は微、われらの幻は美、
靈は身体を捕へて大空にあぐ、
人はおほいなる二つの翼もて飛べるもの、

ひとつの翼は思想、他の翼は愛。

すべてのものしづまりて、おおそかにやさしく、力あり
舟は港に入り鳥は巢に歸り
すべてのもの去りて休みにつきぬ、余は
大虚の中に無限の『愛』脈うつを覺わぬ。

たゞ風——彼は巖の上に蘆葉をかゝめ、

また歌へる幼子の聲をはおびさる、

嗚呼風彼は草葉をかゝめ

また同時に遠く歌をはおびさるよ。

そは何かあらむ、おゝに物みな互に愛し互に睦む、
心の中に暗なかれ、がき思の惱なかれ、

言につきせぬおほいなる平和は

絶わす大なる靈の底より大なる波の上に来去す。

第三 逍遙

日は傾きぬ、『夕』は彼を追ひて

地平線上を染めぬ、

汀上の石によりて白髪の一老翁

悄然落日に向ひて坐しぬ。

彼は老牧者なり山上の牧者なり、

昔はわかく貧しく幸なりき自由なりき、

夕の影丘陵をねぶりしとき

其笛林中に幾たびか響ける。

今は老いて富める過去のかたみ

彼はおほいなるやらかの長となりぬ、
牛羊野より歸り來るとき
世を離れて彼は天を思ふ。

沈まんとする日は昇らんとする日に劣らず、
老牧者はそのみどりの天の下にゆめむ、
目前の大洋は悠々波を堪へて
墓に臨める義人の希望に似たり。

嗚呼おごそかの時刻よ、山、海、風
悉く黙して其騒ぎを収めぬ、
老翁は將に沈まんとする日を望み
日は將に終らんとする老翁は望む。

第四 逍遙

神よ影に染む山々いかに美はしき
海いかにやさしき、空いかにすめる、
過ぎ行く月日何かあらむ、
我は無限に觸れぬ、我は永劫を見ぬ。

あらしよ、うれひよ、我靈の内に黙だせ、
我心かくまで神に近づきしとあらざりき、
落日は焔の目もて我を見ぬ、
おほいなる海我に語りぬ、われは身の聖きを覺ふ。

我を憎む者に幸あれ、我を愛する者に恵あれ、
我はわがすべての時を靈と愛とに與へむ、
譽を求むる者はおろかなり、理をあさる者は愚なり。
余は——余は只愛するを知るのみ残れる餘幾何もあらじ。

紅日沈みかゝる海上より星は出でぬ、

鳥は歌ひぬ、波は脚下に叫びぬ、

莊嚴のたゞなかに日は落ちゆきぬ、

あゝ見よ、靈いかに大なる、人いかに小なる。

すべての造られしもの、燃ゆる火、震へる海

みな至上者の名をたゞなかに知るのみ、

彼等の發する響きを集むるはわれなり、

おのゝものものは片語を綴り、奈は全句を語る。

淵よ、爾と等しくわれ聲を天に擧ぐ、

海よ、我爾と共に夢む、山よ余爾と共に祈る、

自然は清淨永遠の香、

余は——余は優美有情の香爐。

深 淵 (ユーゴー作)

人

あらゆる非生の間にありて獨り生ある靈を見すや。

猛獅を沙漠に逃げしむるものは我なり、

戸閉づるとき鍵を造るを知るものは我なり。

われはバツカスといひ、ノアといひ、ヂユーカリオンといひ、

セイクスピアといひ、ハンニバルといひ、セイザアといひ、ダンテといひ、

勝利の劍を取り「影」を逐ひ、暗を驅りて、

あらゆる恐の中に入り、あらゆる暗の中に進む。

われブラトウとなりて能く見、

われニートンとなりて能く探る。

光榮のアゼンスは鴟より出でずや、
壯大のローマは狼より起らずや。

大空の猛鷲驚きていふ、「わが途途に爾におくる」と。

われ墓の中にキリストを有し塵の中にデョアを有し。

衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ぶ。

われ遂に人なり主なり自由なり。

我は古のアダムなり、我よく愛し我よく知り我よく感ず。

我「生命の樹」を抱き、さながら嵐の呼吸の如く、

金果累々の枝を震ひて曰ふ

「民よ、走りて而して拾へ」と。

かくてあらゆる果物は雨の如くに落ちぬ。

わがため、わが子のため、人間のため、

科學は恵みの天より降り生命の果は永劫の根よりいづ。

あらゆるもの萌し、あらゆるもの育ち、

野火の林を掃ふが如く「進歩」は天を仰で走り、

「過去」を呑み去りて万物みな進み行く。

われ欲すれば物みな従ひ、不屈のもの悉く譲る、

われは全能の神に似たり、

彼は蜜を作り、われは酒を醸す。

先に獄なりしもの今は宮殿なり。

われ南極と北極とを結び、

靈を電光の翼に載せ、

ネムロットの鐵弓を張り、

鏑を鳴し矢を飛ばし、

四海に放ちて、わが言となす。

距離なるものは今すでに存せず、

ライン、ガンヂス、オレゴンの流、

わが見るとある恰も同車の旅客の如し。

老いたる巨人其名は『望』といふもの、
我今之を矮人となしぬ。

わが奮進の前タイタン嫉みて頭をもたげ、

フランクリンの電光を飛ばすを見て、

コーカサス山上驚きの聲あり。

むかしデユビクアが塵中に投せしもの今フルトンとなり、

鯨鯢を驅りて大海をわたる。

カルバニは『死』を滅し、

ボルタは天使の劍を熔かす。

世界はわが聲に震ひて替り、

カイン死して『未來』は若きアベルに似たり。

我再びエデンを得ん、われ再びバベルを興さん。

我なくば何ものか存せん、自然は初なり、我は終なり

鳥呼地球。爾の主なり王たる 我を見ずや。

地球

爾はたゞわが一小虫なり。

睡眠、憂苦、冷熱、飢渴

爾は無数の煩を負はす。

爾老いては幻なり、死しては爾たゞ影なり。

爾は塵に去り、我は白晝に残る。

われは常に春あり花あり、愛なりあはれの曙ありて、

千万の年を経て猶わかし。

我一粒より大樹を作り、我一核より長松を起す。

我は葡萄の房を染め、或は黄穂の束をつかぬ。

晝の十二時夜の十二時はでやかなる姉妹の如く

手を取り舞うてわがおもてを廻る。

我は源なり、混沌なり、われ物を葬りわれ物を創む。

緑の空に『朝』の生れしとき我そおにありき。

ウエスピアスはわが工場なり、ヘクラ山はわが吹爐なり、
我はエトナの高き煙突を赤うす。

われクツコー山をゆるがせばピレネースの嶺また震ふ。

我に僕として星ひとつあり、

『夕』來りてわが一面に黒布を掛くる時は

やさしき月ありてわれを照す、

凶人もし森の中に、暗の中に、

影の中に逃るゝときは

我々の燈を取りて彼を追ふ。

われ火の中、波の中、空の中に生を起して、

或は虫を生み、颯風を生み、鯨鯢を生む。

わが生ける圓球は大水深林高山に

掩はれて恰も胃を破るに似たり。

土星

微かにつぶやく聲は何ものぞ。

地球よ、爾一粒の砂、

かの一片の灰に伴はれて狭き境を廻る何の用ぞ。

我は壯大の綠空にわが大圓周を畫く

大虚は見てわが雄麗に驚く、

わが大寰は青白き空を紫にして

恰も金丸の如き七の大月を抱く。

太陽

しづまれもだせ大空のもとに、わが遊星よわが群臣よ、

我は牧者なり爾は牛羊なり、

二の車大門を過ぐる如く

土星と地球と並びてわが最小の噴火口に入らむ。

混沌よ我は法なり、泥よ、われは火なり、

見よ、われは生命なり中心なり、

太陽なり、永劫なる光のあらし也。

天^ツ狼^ム星

あゝ此原子何をか語る、もだせ塵なる太陽、もだせまぼろしよ微けき光よ、其牛羊大空に散る牧者よ、遊星のあるじよ、緑の空の中爾七八の牧をもてる何の效ぞ。我は壯大なる圓球の中に百千の火球あり其火球の小なるもの猶百の月を有せり。あゝ夫の微球と並びてかゝやくも益なし、矮人星と巨人星を知るとあらじ。

アルデバラン

天狼眠りぬわれ覺めぬ、かれは殆んど動かす、我に白と赤と緑と三の太陽あり、各世界の中心となりて無形の鎖に繋がりにめぐる

其速きおとさながら酔へる船の如し、

電光は曰ふ「われ彼等に從ふおと能はず」と。

アークチユラス

我に四の太陽あり

其よつの光たゞ一道の電光をなす。

彗星

われは「夜」の恐なり彗星なり。

われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽よ、

我見るとおろ爾はおのゝたゞ一粒の芥子なり。

北斗七星

神秘の腕われを常に大空にもたぐ。

われは北天の燈明臺七の枝を有するものなり、

わが火は一切の終る大虚のはしに目ざむ。

北極より南極に、あらゆる赤道のもと、

あらゆる熱帯のもと、あらゆる宇宙は曰ふ
『ふれ恐るべき極天の黒守兵なり』と。

暗き天空の清氣、衆圓珠に滿つるもの、

かれ我の何たるを知らず。

我大空に目さむる時彼われを見つめ、

大なる光われの進むとき、

彼たちて震ひて、わが進軍の響を聞かんとす。

彼われを天空にさまよふ巨獸と見なして

われに恐るべき名を與へぬ。

我は北なり、光なり、目なり。

生ける七の目、太陽を瞳子とするものなり、

永劫の暗に照る永劫の燐なり、

われは爾等の上に現する北斗七星なり。

天狼は其すべての圓珠を合して

猶わが最小の爐中一点の火花に過ぎず。

我が二の火の間に百千の世界は悠々としてあり。

われはひかる天空の頂に住む、

彗星の光もみどりの深空に轉するわが車に觸れど。

天の衆星その黄金の球と

白銀の月とを曳いてあゝに來りかしあに去る、

我もし進んで夫の精氣の大海に入らば

一切の太陽皆わが途に碎けん。

黄道十二宮

爾の道わが道に比せば何かあらむ。

爾の光天のいづれより來るも

皆深淵の底盤たる我にあたる。

我は衆太陽に曰ふ『爾去れ』

『爾來れ』今爾の順なり『我爾を呼ぶ』と。

我は、にありて人は緑の空の中に
弓手に逐はれて猛獅、金牛、白羊の走るを見ん、
われまた秘密の井中にかの寶瓶をしづむ。
我は巨大の輪機なり。

無象の秩序われより出で、
かすかに光る深淵に下る、

人目もし空の深奥に入り、おほいなる恐のただなかに入らば。

聖きフレガートの流に黒むイキシヨンの如き

恐るべき罪人、苦める、おほいなる魂を見ん。

かれらは高きに到らんとし、

あなたに走る星を棄てあなたに來る星に乗りて

深夜のすおき階段を上らん。

銀河

百万、千万、無量億の星、

すおき影の下、きよき覆ひの下、

我は莊嚴なる星宿の森なり、

我は目と光との集合なり、

さびしき、音なき、光の厚みなり、

わがかやく淵は常に劫初の流に溢れて

あらゆる爾等衆星の源なり。

鳥呼低きにある星よ、我は爾を去ると違し、

わが宏大雄麗不動の海、

わが無数の太陽の集りは

鈍き爾の見るところ、たゞ大空の底にありて響の絶ゆる荒漠なり、

暗夜にひろがる紅灰の一片なり。

さばれ我が生ける光の中に入るものには何等の恐ぞ、

わが紅雲を近きに見るものには何等の恐ぞ。

點はおのゝ星なり、星はおのゝ太陽なり。

星限りなし、奇異壯大のもの限りなし、
或は天使に似たり、或は悪魔に似たり、
遊星の数はた窮なし。

宇宙の衆群内に情あるもの生あるもの、

おのゝ一の太陽をめぐる、

人おのゝ心あり靈ありて、

六合にわたる眼目の映する鏡なり。

心おのゝ愛あり、靈おのゝ天あり。

おのゝ生れ、おのゝ死し、おのゝ長じ、おのゝ長ふ。

内に光満ち、内に暗溢る。

わが下の谷の中、わが光に眩めきて

遠きにかゝやく光りの粒、

なんぢ衆星、爾衆球、爾彗星、

爾黄道寰、爾震ひて青白き太虚をわたるもの、

爾の音は遠きに響く胡角に似たり。

我が太陽を有するは爾が蚊を有するよりも多し。

わが無限大は生けり、かゝやけり、豊かなり。

時としては千萬の世界暗き穹窿の隅に迷ふて

わが光の中に消し去るにあらずや。

星 雲

遠きを去る一片の塵、なんぢ誰にか語る。

大虚の中我殆んど爾の聲をきかず、

我はたゞ爾を暗光として夜の緑の空の隅に知るのみ。

我をして静に照らしめよ、我は暗の白きものなり、

すこき混沌の中に生せる幽界なり。

我は南極なし、北極なし、

我は理想中の生ける現實なり、

廣大なる夢の詳われよりいづ。

浩蕩たる精氣の大洋涯なく岸なく

其流一たび去りてまた歸るおこなし、

中に神秘の島嶼を造るものは我なり。

無限

一切のもの、わが暗き合一の中に生く。

神

我一たび吹かば、萬有おこしく空たらしむ。

(譯者附記、固有名詞は皆英利吉讀みとなしたり一定の日本語みよなれるものは其まこ)

故郷の墳墓 (ユーゴー作)

(『冥想録』を亡女のかたみにさへる歌)

永遠の眠の床より起ち、冷めたき布の蓋ひを去り、

目を舉げ手を開きて此書を取れ、
おを受くべきものは爾なり。

我が靈魂、わが企望、わが夢、わが恐、わが悲、みな此中に混じ、
わが生の幻、わが痛、わが光のあけぼの、また之に續ける愁の夕、
影こそそのあらしと、薔薇こそその花冠と、
みな此中にあり。

或は樂しき或は悲き此書はいづおより起れるや、
陰霧をつんざく青白き電光は何處より來れるや、

四歳おのかた我は凄冷の風雨に住ひき、
此書はおより出で來りぬ、

神は口授しぬ。余は書き取りぬ。

余は風に散る一片の葉なりけり。

靈は曰ふ行けど、かくて余は去りぬ。

而してわが此書を終りしとき、
此書形をこりて初めて動きし時、

壁は緑蘿を纏ひ塔は挽歌に

鐘聲を混する野なかの寺は我に語りぬ。

『爾の歌は終りぬ、詩人よ、そを我に賜へ』^{と。}

風吹き渡る碧の森また曰ふ我そを請はむ』^{と。}

花を點する牧野は曰ふ『そを我に賜へ』。

海はあの書の開くを見て曰ふ

いかなれば我之を得ざる、かの書また一の舟なるものを』。

星は曰ふ『此讀歌を受くべきものはわれよ』^{と。}

おほいなる風また叫びぬ『夢みる者よ、そを我に與へよ』。

しかしてあまたの鳥は曰ふ『人寰を遠く離れて育ちし此書、

君は人間に與へんとすや、わが翼に乗せて之をわが巢に運ばしめよ』。

さもあらばあれ、わが書は風に與へざるべし。

あらしに狂びて潮を吐吞する海洋また之を得ざるべし。
蜜蛙群がるみどりの野、

時その針を轉する野寺の塔、また之を得べからず。

之を得んもの牧場にあらず、星にあらず、

鷹にあらず鳩にあらず、すべての鳥にあらず、巢にあらず。

——われ之をたゞ墓に與へむ。

二

あゝ、昔八月秋風の夕、

飄然友を捨て、われ郷を去りき、

巴里の都はかなたに隠れぬ、知人の影は一も見ねず。

聲なく言葉なく見るとなく、われ獨り逃れぬ。

たゞはれ然たる一孤影。

たゞわれ知りぬ、われは其行くべき處に行かむと。

嗚呼『われ惱む』の聲猶わが口に出でざりき。

而して深谷の底に引き入れらるゝ如く。
路の險夷、空の寒温、われはつゆも覺わざりき。

(往事さながら夢に似て山嶽いたみて聲も無し。)

母と姉妹と屋裏に哭せる時、

われは失望の力に驅られて起ち、

散髪を北風に乱して、

古寺の傍、蕭條の郊野に行き、

天を仰ぎて彼女の墓に近寄りぬ。

樹林は叫きぬ『來る之父なるものよ』と。

かくて荆棒を踏みわけて荒墳の間を過ぎ、

苔に掩はるゝ石の上、乱枝のなかに膝つきぬ。

あゝわれ呼びしとき爾の眠いかなれば覺めざりし

一竿を肩にせる無心の漁父等は怪みて過ぎぬ、

『かの思に沈める、夢むるものやたそ』と。

かくて日は暮れぬ、長く印せる地上の影と

夕づゝの光と前後共に消え失せて、

われ獨りわれに聽けるものに訴へつ、

其緑の草の上、わが晴天の暮れ行くを眺めし處に、

點々にがき涙と共にわが万石の愁をそゝぎぬ、

一片また一片緑の葉を心ともなく摘みとりて

忍ぶは彼がいはいけなかりし昔の日、

百合の花薔薇の花を我に持ち來りし時、

さゝやかなの手にわが筆とりて、

くれなるの指を染めつゝ笑みし時、

忍びてかくて墳上に育ちし花の香を嗅きて、

冷めたき緑の床を見つめぬ。

其墳塋を貫ぬきて射しはそれか靈魂の光か、

さなり、幽冥彼を奪ひしうれひの時刻、
傷心の空と悲痛の胸とに響けるとき、
妨げあらでわれかの墳を弔ひき。

あゝ今は……流よ、森よ、幽谷よ、彼女は知らむ(然らすや)
四歳よとおのかた光照らざる淋しき心、われ行て
夫の墳上に祈らざる——それは我罪にあらざるを。

三

さればかの暗き路、みどりの苔、冷ひやの墓。

陰林咽ぶ夕の野寺。

墳墓に注ぐ悼みの吐息。

その辛さは今しおもへばさちなりき。

あの年おる爾何事をなしつるや、

暗きすみかの中爾は生命を今見るや、

いかなる影の日時計もて爾は時を測るや、

爾は時に音なく他の眠れるものを押しやりしや、

爾はわれを待ちて半ば目ざめしや、

爾は無限の暗窓によりて影の中に旅人を探しつるや

暗き永劫の中に来れる者を聴かんとて

緩く纏ひし葬衣の中より爾は耳を傾けしや。

『それは誰ぞや、わが父いまだ来らじ』と

かくて沈める船のおと再び暗に身を伏して

聲も微かに爾等ふたり共にわが上を語りしや。

げにいくたびか露を帯びて

庭より心よりわれはた百合花を集めけん、

げにいくたびかわれ野薔薇の花を集めけん、

いくたびか「明日は別れん」とつぶやきて
アルフェールの塔にわれは音訪れけん、
かくて愚も風と迅き船を待ちわびつ、
まなく我手は悲みて開きぬ、我曰ひぬ「もの皆移る」と、
かくて集めし花束は惨として暗夜に落ちぬ。
嗚呼彼女のわれを待ち詫びんを思ひ、
心に秘めし思を取りて
かしらに行かんものに託せんごせしも幾度ぞ、
基督呼びしときラザロは眼を開きにき、
われ彼に呼びしとき彼の目いかなれば開かざりし、
影の秘密をふたゝびも「愛」を破らんとなしつるは、
神のなしゝとを父も爲さんと願ひしは、
そはあやまてる舉動なりきや。

四

微けきたよりの此書いかで

行きてかの沈靜に叫き、かの岸に流れんことを、

愛の吐息愛の涙此書いかで

あなたに落ちて墓に入らんことを。

その墓さきには露と曙と春と接吻と

美はしき花嫁のゑみともろともに

わが喜、わが心を呑みさりきを。

いかで此書僞らぬ希望の叫、

嘆の歌、別の聲、

はた羽かせ我に觸るゝ夢とならんことを。

さらば彼女は曰はん「あるもの來りぬ、われ聲をきく」と

此書いかで暗夜の中わが靈魂の歩みたらんことを。

此書あれ曙の白き鳥の、

はた夕暗の黒き鳥の飛びかけりあふ無数の群、
此書あれ地平線外に走る『追憶』の翺飛、
此書あれ囚居の戸よりわが送りやる混沌の群。
空よあらしよ風よ雲よ、われ汝に之を託す、
しづかに我に唄く空の大波
いかで此書をいとしみて遠くあなたに送れかし、
風は心して散すとなく
冷めたき墓にまめやかに
離れて遠きわがたまものをいたせかし。

嗚呼げにわびしき巻の中に、
大空の下に集めたるしらべの中に、
此書の中に、歌謡の中に
わが目、わが禍わが悲、わが煩悶

わが愛、わが勞、わが日々を生を記したれば
神なほいまだわれのみまかるを許さざれば
きはれまた我行きて彼に語らん要あれば
秘密とあらしとに満てる此書の上に
無限の劫風の吹くを我感すれば
人界の暗と哀へと思とを皆之の中に注ぎぬれば
わが靈わが血わが心より
此暗きさびしき歌の韻をわれの作りたれば
いざゆけわが書、暗空を過ぎて
あらゆる遅き歩みの向ふあなたに
木の葉の如くたましひの如く
行きて青苔と暗夜と墳塋とに飛べ、
一切の名あるもの、皆はしり行く深淵に行け、
墳墓の最も幽深なるかしおに落ちよ、

さらば彼女の側に、かしおに眠る光る莊嚴の天使の側に
見るものあらん此書このの——此深淵の幽花の開くを。

五

あゝ曙のみどりの空、爾は我を欺きぬ、
あゝ人界の幸、爾をつらく我は償ひぬ、
世には墳墓に語るものあり、
さびしき青白き死者に語りて
葬衣の黒きひだを震はし、
其言或はあらく或はやさしく
石を動かし波を動かし雲を動かし
恰も森の響の如く自然の一の聲となるものあり、
我いまかゝる伴に加はるの權を得たり。

あゝわれ墓標のたゞなかを進み、

群木叢枝の中に髪を亂し、

靈魂暗に迷ひて棺上にうつむき、

鉛に釘に地上の虫よ、

冷かに笑める骸骨に、齒を喰ひしはる骸骨に、

指固まれる手に、頭骨に、

祈禱を知る脛骨に悟を求めしも幾歳ぞ。

あゝ我すべてを穿ちぬ、すべての底を探らんとしぬ、

禍福いかなれば世にまじる、われ之を知らんと願ひき

われ問ひぬ「我何をか信すべきか」

われ光と曙とほまれと

たのしき幼子と清き乙女と

愛と生命と靈魂と皆悉く之を究めぬ。

我何を學べりや、われすべてを攫みて一も得る處あらざりき
我多くの夜を見ぬ、我多くの空しきをなしぬ、
吾人何ものぞ、『つねに』の語は何の意味ぞ、
われ胸中に穿てる墓に
夢と愛と望とを皆悉く葬りぬ。
誰か悟を得る、教いづくにある。
あゝ我ふたゝびいにしへに返り
草のうへ牧場のほとり森の傍、
夕焼けの空にほゝるみて幼きむすめの
白き小さき手を取りつ
喜に溢れ平和に満ち、
空のかけやくにまかせ、小兒のあまゆるに任せ。
かの碧空とかの無心とに身の浸さるゝを感じ得ましかば。

光る大神と、敬ふ天使と、
われ此間に争ひぬ、われ勝ちぬ、恐なかりき、悔なかりき
俄にわが門『死』の前に、
恐るべき暗影の不意の音づれに開けぬ。
あゝ神秘の靈爾空しく碎けしものを残して去りぬ、
爾わが天使を捕へぬ、爾彼を打ちぬ、
それよりあのかた墓はわが足の向ふ處となりぬ。

六

セイヌの岸の逍遙も今は叶はず、
われいにしへの道に今はわ行かじ
井のうへに座る洗婦の如く
永劫の深淵の壁に突き當るの外はあらじ、
恐るべきソリムの爲め巴里はわれに閉されぬ。
ノートルダムの高塔は今沈黙と暗夜とを有するのみ。

而して頭上にわれは星辰の殿堂を仰ぐ、
而吾は叫ぶ「ルーアン、キレキ、ユール、カアテベック」と、

『影』はわれに叫ぶ「オレブ、セドロム、バルベク」と、

而して吾去らんとすれば『影』直ちに我を留めて曰ふ、
『みごりの大空に向け』と、

われにいふ「爾の路は塞がりぬ、

爾いま夜と風と流とを見よ、

爾何をか思ふ、幽獨者、爾何をか爲す、

爾足下に大地ありと思ふや、

運命を離れて心ともなく爾何れに行かんとするや、

あゝ夢むる者、爾萬有天地を顧みて

波浪の中に靈魂の響を聞け、

爾もし世に意あらば顧みて俗界の煩惱を思へ、

爾もし髪に塵を混せんとせば

せめては巨大の塵を求めよ、

爾道の爲めに苦むも猶之を外にして

おほいなる寂滅を見よ、寂滅爾の意に適はし。

爾専ら再びのぼるべき天上界に頼りて

うまに爾の一片の塵骸を捨てよ。

あゝ天より流塵せられしもの

手を故園の星辰界にのべよ、

爾その曙の再びかしまにあくるを見よ、

爾おほいなる一切を見るおほいなる目となれ、

爾萬有の融化し終るかのおほいなる神秘を思へ、

うまるゝ、生ける、進める、亡べる、崩るゝ、

一切の人類、一切の墳墓を思へ」と。

さはれ我心常に痛む、其痛むほどり常に同じ。

蒼天暗夜 永劫途に

一の靈を亂し一の塵を靜むるあと能はず。

天上穹窿の壯嚴の光

以て涕を乾かすに足れりや。

あゝ天地は荒涼の墳墓すみわたる夕、夢むる森、

やさしき月をわれに示すもかひ無しや、

我はしづかに之を聞きてしづかにやさしき眠に入らなん。

七

あゝ花を、あゝ花をわれ集め得ましかば、

われかの二の冷めたき床に百合の花を集め得ましかば

われ花をもてわが青白き天使を蓋ひ得ましかば。

花は金なり碧玉なり黄玉なり瑪瑙なり、

花のたゞなかにある棺は埋まるをねがはめ、

花は死者を愛す、神は其根をして

骨に觸れ其香をして靈に觸れしむ。

我かれを愛せしも今之をよくせざれば――

われのあなたに再び行くを神いま許したまはざれば――

冷めたき運命^{運命}彼我に迫りて父は悲み子は眠り

追憶われを苦めて墳塋彼をおほひぬれば――

今は一片の草葉をもわれ彼の無聲の墓に投ぐるを得ざれば――

されば彼女少くも我靈を得んおと善からずや。

あゝわが屋上に叫ぶさびしき風よ、

あらしよ冬よ其冠もて我瓶を打てるものよ、

海よ夜よ――われ彼の爲めに此書の中にわが靈を置きぬ。

此書を取りて而していへ『おはわが後に

残りて夢むる生者より來ぬ』と。

魂よおの書を取りて遠く隔つとも我聲を知れ。

あゝ爾の灰は我が息みの床なり、

爾の墓はわが望なり、わが愛なり、わが信なり、
爾の葬衣は常に生命とわれとの間にひらめく。
いざ此書を取りてあゝより神聖の歌頌をおぼせ。
爾の暗き手の中に此書いかでまぼろしとなれ、
此書わが天使の眼に照されて
曙のおとく白うなりゆげ、
吹く息にそだつ爐火の如く
夕に過ぎ行く光の如く
香爐の火花のあらしの如く
行きて流れて遠く跡なく
やがてすおくがややく爾の目の下に
書の幾丁星となりて皆暗中に去れよかし。

八

嗚呼人何を爲すも人何を語るも

其靈或は天馬の翼に飛ぶも
或は昆虫と等しく地上に這ふも、
微かにひかるゲッセマネよ、人は常に
人は常に爾のさびしき洞窟に到らむ。
あゝつらき怪しき悽愴の巖、
靈魂と運命との争ふ處、
惨澹たる造化の幽淵の戸口、
欲情の獸近より臨みて震ふ處、
更にあやしきさまざま「愛」の
悄然として髪を亂して入る處。
あゝ墜落よ、隠退よ、幽谷の門よ、
ゆくゆく我生の窮まり盡くる處、
歲月の泥に印せる吾人の歩み止まる處、
禍おとに重うして松柏のうれひ悲む處、

陰影陽光相まじりて天使の驚き震ふ處。

吾人はつねに此幽居に來り
あふに思にたへず悄として曰はず。

あゝ逝ける者安かれよ、眠れ眠れ眠れ眠れ、
しづかに形を替ふる混沌無數の群、
眠れや野、眠れや花、眠れや墓、
眠れ人家の屋壁、墳塋の堆石、
眠れ林下落葉の堆、眠れ巢中羽毛の片、
眠れ眠れ草葉の微片、眠れおほいなる無窮の群、
しづまれあらゆる樹木あらゆる果草、
しづまれ悶々湧きたつ大洋の波、
しづかに聲なき死者の沈黙、

莊嚴神聖なる敬神の恐、皆悉く休へよ、
恐るべき疑、おほいなる不信の暗、

おそろしき沈黙幽微のもの、

自然、中心、周圍、内外、

一切の渾沌、上帝の幽獨、皆悉く静かなれよ。

あゝ霧深き呼吸に走る塵界の民、

あゝ原上を走るものすおき歩、しづまれよ。

眠れ爾泣くもの、眠れ爾疵つけるもの、

『憂』よ、『憂』よ、『憂』よ、爾の聖き眼を閉させ、

あらゆるもの宗教なり、侮慢のもの一もあるとなし。

あらゆる生物のうへ、あらゆる受造のうへ、

あらゆる善惡禍福のうへ、

やさしき、はげしき、うるはしき、いやしきすべての上、

見よおほいなる天の平和の四方より降るを。

あゝ眠れる地獄は天堂を夢みるよ、
 流よ海よ風よ魂よ皆おどろく静かなれ、
 見よ今上帝の前山嶽の上
 絶崖の側にたちて星と人間と
 天上の萬事と暗空の彗星と
 あらゆる渾沌とあらゆる萬有との現はるゝを見るまごころ
 暗に眩し惑に酔ひ、
 無限の大空に天象の畫かるゝを見て
 傷み惱めるさはれ思澄める冥想の人
 鋼鐵の壁上に人生の問題をしるし
 怪奇渾沌のたゞなかに曉を見んとし
 震ひて茫洋の深崖にたち、
 かけり飛び行く白鳥の目を追ひて
 惨として光と色と曙とに伴はれて

烟霧うづまく幽谷のほのかに現はれいつるを見る。

(二千八百五十五年十一月二日ゲルンセイの適居に於て)

(註) 一千八百四十三年二月十五日ユーゴの長女レナポルデイ
 ン其戀人シャル、ソツケリイに嫁して平和幸福の生を送り
 しが同年九月四日過ちて夫妻共にセイヌ河に溺死し、本露
 中「爾等二人」等の句は此夫妻を指す也、

附 録 終

明治三十四年五月十五日印刷
明治三十四年五月二十日發行
明治三十四年八月廿五日再版
明治三十五年七月五日三版
明治三十七年六月一日四版
明治四十一年六月廿五日訂正增補五版印刷
明治四十一年七月一日訂正增補五版發行

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

著 者
發 行 者
印 刷 者

定價金五拾錢

土 井 林 吉
長 井 庄 吉
今 井 萬之助

發行元

東京市神田區裏神保町
上田屋書店

卷之五

上田宗壽

上田宗壽

上田宗壽

上田宗壽

上田宗壽



上田宗壽

上田宗壽